

生きる苦勞を取り戻す —べてるの家の30年の歩みから—

北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科教授
社会福祉法人浦河べてるの家理事
向谷地 生良

古屋龍太 本日の記念講演には、北海道の浦河べてるの家を立ち上げ、ソーシャルワーカーとして長年関与してこられた、北海道医療大学教授の向谷地生良先生においでいただきました。向谷地先生については、NHK、TBS等のテレビ、マスメディアにおける「浦河べてるの家」の紹介で、既に多くの方がご存じでしょう。本日の資料集の1ページに、向谷地先生及び浦河べてるの家の皆さんが書かれた書籍なども紹介しています。本日は向谷地先生の講演ではありますが、べてるの家の当事者の方々にもおいで頂いています。一緒にお話をして頂けるとのことですので、ご静聴よろしくお願ひします。それでは、向谷地先生、よろしくお願ひします。

「べてる人口」の増える浦河の町

向谷地生良 皆さん、おはようございます。ただいまご紹介いただきました、北海道の浦河から来ました向谷地です。ソーシャルワーカーをして今年で37年目になりますが、北海道の本当に小さい海沿いの町、私がこの町で暮らし始めたのは1978年です。当時は2万人少しだった人口が、間もなく1万2千人台になろうとしていますから、人口も4割ぐらい減っています。

町がどんどん寂れて、地域を見渡しても、昔の町の大企業がどんどん撤退したり、いろんな役所が合理化で撤退したり、私が勤めていた病院も417床の大きな病院でしたが、今は200床台の小さい病院になり、それを維持するのにフーフー

言っているような状況の中、いわゆる「べてる人口」は着実に増えています。どんどん子どもも生まれて、37年もこんな仕事をやっていると、当時はよちよち歩きだったメンバーの子どもが親になり、その子どもたちがまた子どもを産み育て、順調に苦勞が循環するというプロセスが生まれており、「べてる人口」はどんどん増えています。あと100年、200年したら、浦河の町全部がべてるになるのではないかと(笑)、こんなことを町の人たちが聞いたら怒るかもしれませんが、そんなことを真剣に心配している人たちもいる、そんな町から今日はやってきました。

私たちは、週末になると、こうして全国への営業活動を20年続けてきました。20年間、週末は、みんなの書いた体験をたっぷり載せた本を持って全国を飛び回り、そして、皆さんと色々な出会いを重ねて、いろんなアイデアをもらい、そのアイデアを地元を持ち帰り、私たちは日々創意工夫を重ねています。そして、また全国に飛び立つ訳ですが、私たちの取り柄は数限りのない失敗を繰り返してきたことです。100回失敗すると、一つか二つ面白いことがひょこっと見えてくる。それを大事にしながら、そのことをまた自分たちの中でゆっくりゆっくり大事に育てていく。しかし、その一つや二つの成果や成功は、あっという間に時代遅れになりますから、またそこから新しいものを生み出していく。本当に一月単位で、べてるという一つの組織は常にリニューアルされていく。その原動力はまさに病氣です。

私は、ソーシャルワーカーとして精神科医療の現場に飛び込んで、最初はアルコール依存症の人たちを何とか立ち直らせなければならないとか、統合失調症の人たちが何とか回復できないかと、本当に1日中走り回って、走り回って、3年ぐらいいして胃潰瘍になって、ほとんど疲れ果てた時に、そうじゃないということがやっとわかる時期が来ました。

過疎の町浦河の中で自分もソーシャルワーカーとして暮らし始めましたが、浦河は町民の3割が先住民、アイヌの人たちです。しかも、先住民の人たちは、話を聞くと、お父さんが戦前朝鮮半島から連れて来られたり、いろんな誘いの中で、北海道辺りでいわゆる強制労働的な本当につらい生活を余儀なくされる経験を積んだ人たちです。そういう過酷な運命をたどった、十勝のたこ部屋労働みたいな生活を強いられた人たちが、この温暖な日高に逃れてきて、アイヌの家庭に囲われて、そこで新しい家庭を築いていく。そんな歴史が、この地域の中にもありました。そんな浦河の町の歴史と出会う中で、私はソーシャルワーカーとして、まさに日本という世界の巨大な歴史の壁に立ち向かうような、そういう力のなさを感じたこともあります。

今日のタイトルは「生きる苦勞を取り戻す」ですが、今回の学会のテーマである「希望としてのソーシャルワーク」ということと言えば、皆さんは「パンドラの箱」というのを聞いたことがあると思います。ギリシャ神話のゼウスが、パンドラに「この箱を絶対に開けてはだめだよ」と命じた箱です。そのパンドラはさまざまな災いがぎっしり詰まった箱で、絶対に開けてはならない。もしこれを開けたら大変なことになるという箱でした。ところが、それをつい開けてしまう。そこからいろんな災いが飛び出し、最後に飛び出したのは何かというと、希望だったというおちです。

まさに、いろんな災いとか、生きづらさとか、困難とか、そういうものが山積みになった中に、小さな希望が見えてくる。そんな37年のべてるの歴史を、まさにパンドラの箱の物語から思うこ

とがありますが、今日は1時間、浦河の紹介をさせていただきます。

順調に窓際に降りていく人生

向谷地 そして、今日一緒に話をしてくれるのは、物心ついたときからというのか、若かりし頃から、何か人と違ったものの見え方、感じ方、伝わり方、そして、どんどん人とのつながりの中から孤立し、現実の情報からもどんどん遮断される中で、私たちは「五感のゆがみ・ひずみ」と言いますが、その五感のひずみの中で、自分の人生を閉ざす、自分の人生の可能性を狭めてしまうような経験を生き抜いた、伊藤知之さんと亀井英俊さんに話を伺いたいと思います。午後、またこの3人でワークショップをしたいと思います。

現代の中で統合失調症を抱えるということは、一番厳しい現実を生きなければならない。いわゆる病気、障がいというものの大変さ、重さ以上に、むしろこの社会の中で生きることの大変さを味わいながら、その中で生き抜いたこの2人の経験は大変貴重なことだと思っていますので、よろしくお願ひします。では、伊藤さん、自己紹介をお願いします。

伊藤知之 皆さんこんにちは。浦河べてるの家のメンバーの伊藤知之と言います。清瀬というところは、日本社会事業大学というところは、何か懐かしいという感覚があります。僕は統合失調症を抱えて、最初の頃は幻覚とか妄想とかがあって、今ではパニックする症状が残っていて、いろんなことが次々に起こったりすると、慌ててしまったりとか、電源が落ちてしまって、何も頭に入らなくて、会議に出てもこうやってうつむいたりする、「強制終了状態」になることが今でもあります。

向谷地 伊藤さんは、大学を出たあと、道庁の役人をやりまして、配属になったのが浦河です。

伊藤 浦河の福祉課です。

向谷地 福祉課でしたね。私は、そのときに浦河でワーカーをやっていたから、伊藤さんと最初に会ったときに、「もしかしたら仲間じゃないかな」という気配が、既にその頃から結構ありま

した。そうしたら、順調に、伊藤さんは休職になり、窓際になりました。(笑)

実は、私も病院で、私のソーシャルワーカーとしての仕事の仕方が尋常じゃないと言われていました。またあとで紹介しますが、病院の診療チームの中でワーカーとして働きながら、家に帰ったらメンバーたちと一緒に同じ屋根の下で暮らすという公私混同がはなはだしいスタッフでした。土曜日、日曜日になると、一緒にキャンプしたり、一緒にご飯を食べたり、あいつは何をやっているんだと、距離が近いも何も見境がないと批判をされました。私が最初に赴任したときに、周りから言われたことは、「小さい町だし、住んでいる場所とか電話番号を知られたら大変だよ」と言われました。そう言われたときに、「そうですか、わかりました」と言って、早速名刺を作ったのですが、その名刺の病院の住所の下にしっかりと自分の家の住所と電話番号を書いて、患者みんなに配りました(笑)。そういうへそ曲がりな私ですから、あっという間に窓際になりました。

5年目に精神科病棟に行ったら、朝、一番お偉い先生が私の前に立ちただけ「今日から来ないでくれ」と言われ、「今日から出入り禁止です」と言われました。「そうですか」と返事しましたが、まさに青天の霹靂です。その気配は前からずっとありましたが、ついに相談禁止です。患者との接触禁止になりました。伊藤さんも窓際でしたが、私も順調に窓際をやっていました。

私は変なワーカーで、窓際になって相談禁止ということで、医事課の事務室の窓際に席をあてがわれて、本当に窓際生活をしているときに、私は変な性格で、すごい闘志が湧いてきました。だんだん追い詰められて、仕事をはずされて、このままプレッシャーをかけられたら、十分鬱になる資格があるのではないかと思ったときに、私はメンバーたちと結構近いところに隠れているという、何かうれしさがこみ上げてきました。この危機とか、この行き詰まりを絶対無駄にはだめだと。一層この行き詰まりをしっかりと生きて、ワーカーとしてこの危機や困難を生きたいという証として、

チャンスだと思おうと。私の中に変な感覚が湧いてきて、わくわくしてきて、この苦勞を生きてみようという感覚になりました。

相談するソーシャルワーカー

最初にしたことは何かというと、これはいいぞと思ったのは、メンバーに相談できることがすごくうれしかった。今までは相談を受ける立場でした。ところが、しめしめ、もしかしたら、私はメンバーに相談できる可能性が出てきたと思って、今、べてるの家の理事長をしている佐々木(実)さんとか、メンバーに相談しました。

何を相談したかということ、「かつて職場でいろんな苦勞があったり、人間関係でつらいことがあって、発病して、東京で働いていた佐々木さんが浦河に帰ってきて、精神科病棟にあるとき入れられて、一生終わりだと思って、確か逃げ出したことがありましたよね。そういう時って、職場の人間関係で行き詰まって、病気になるまでどんどん追い詰められる中で、今、こうして頑張ってるけど、佐々木さんはどういうふうにして乗り越えられたんですか。私も、自慢じゃないけど順調に苦勞を重ねておまして、ぜひ佐々木さんにアドバイスを頂ければ、ぜひ参考にしたいと思います」と言って相談できました。それは、私にとって一番うれしいことでした。伊藤さんはどうしましたか。

伊藤 窓際時代は、ひたすら耐えていましたね。

向谷地 耐え方はどうしますか。

伊藤 本当に、仕事を任された時の感じで耐えたんですけど、助け方と言っていいかわかりませんが、その当時からこういった飲み物をよく飲むようになりました。「多飲水」と言われているようですが、そういう助けができることを用意していました。

向谷地 水を飲むと体の気分が変わるわけですね。

伊藤 多少そのときは変わりましたね。

向谷地 そんな伊藤さんが少しずつ休職みたいな形になって、べてるに見学・研修みたいに来るよ

うになって、私たちは、苦労人の伊藤さんをぜひべてるに欲しいということでヘッドハンティングしまして、今はべてるで働いて頂いています。今は、この社大の通信教育を受けていますね。

伊藤 受けています。スクーリングで来させてもらって、その後もちょっと訪問させてもらうことがあったので、先ほど冒頭で「懐かしい」と言わせてもらいました。

向谷地 伊藤さんは、役所にいたときよりも、今はものすごく忙しいですね。

伊藤 そうですね。倍以上は働いていますね。

向谷地 倍以上働いたんですね。

伊藤 あちこちに行かせていただいて、打ち合わせも多いですし、メンバーも多いですし大変です。助けで何とか頑張っています。

向谷地 べてるって仕事量がものすごいし、苦労は多いし、複雑だし、いろんなことが起きるよね。

伊藤 はい。それだから慌ててしまって、パニックになって、ときどき大声を出したりとか。

向谷地 しますよね。パニックになったメンバーが電話をしてきて、そうしたら、たまたま出たのが伊藤さんで、パニックになったメンバーが、パニックになったまま大声で電話で叫んでいるわけです。それを聞いているうちに、伊藤さんも大声を上げるので、そうしたら、電話をかけてきたメンバーがぴたっとやめて、そういう効果もありますね(笑)。

伊藤 はい。

向谷地 それから、伊藤さんの慌てぶりは奇想天外です。これもよく知られたエピソードですが、伊藤さんは、慌て始めると目がドングリ眼みたいになって、顔が真っ赤になります。「伊藤さん、血圧が心配だから血圧を測るよ」と言ったら、「わかりました」って言って、血圧計を置いてあるところから取り出して、「手首に巻くんだよ」と言ったら、「わかりました」って首に巻き始めるんですよ(笑)。

伊藤 そんなことがある。

向谷地 本気で、本当に起きるんだよね。

伊藤 はい。

向谷地 これもまた過ぎ去ったエピソードですが、この伊藤さんは一見地味そうですが、結構次から次と彼女が変わるんですね。

伊藤 そうですね。

向谷地 伊藤さんは、私の上の2階で暮らしています。前に付き合っていた彼女はちょっとやきもちの強い方で、「伊藤さんはあちこち講演に行っているけど、向谷地さんで行っているけど、もしかしたら港、港に女がいるんじゃない?」とか言うんだよね(笑)。

伊藤 はい、言いますね。

向谷地 「町を歩いていて、伊藤さんと似た子どもがいたら教えてね」とか、言うんだよね。

伊藤 はい、言っていましたね。

向谷地 伊藤さんに、しつこく夜に電話をかけてきた。

伊藤 はい。そのときは、「伊藤さんには奥さんと子どもがいるんでしょ」というような電話をかけてきて・・・。

向谷地 どう考えてもいるわけがない。だけど、伊藤さんを責めてくるわけね。

伊藤 はい。

向谷地 もうどうしようもなくなって、伊藤さんが2階から下りてきて、「向谷地さん、彼女から責められて困っています」と言ってね。そのとき、たまたまうちのかみさんがいたものですから、「伊藤さん、あなただけだよって、はっきり言ってあげればいい」と言って、目の前でSSTを練習して、練習している合間にまた電話がかかってきて、うちのかみさんが、「伊藤さん、頑張れ」って言って、伊藤さんははっきり言ったんだよね。

伊藤 そのときは、彼女に半分興奮して、「ごめん、実はいたんだ」って言ってしまったんです。(笑)

向谷地 いたって言ってしまったんです。

伊藤 はい。

向谷地 いるって言ってしまったんです。私はその話を聞いて、そうか、こうやって冤罪というのは起きるんだと思って(笑)、本当に人の心理というのは不思議なものですよね。こうやって追い詰められると、つい「いる」って言ってしまって、

それを調書に取られたら伊藤さんはもうね。

伊藤 犯罪人ですよ。

向谷地 犯罪人ですよ。(笑)伊藤さんなら間違いなくて、疑われそうなきは、すぐに私たちを呼んでくださいね。

伊藤 わかりました。

向谷地 こういう伊藤さんですが、こういうエピソードを持っている伊藤さんだからこそ、べてるはほかほかしていて、楽しくて、いやすくて、もしこういう人たちがいなかったら、私たちも続かないかもしれない。

伊藤 そうですか、ありがとうございます。

向谷地 そんな問題があるけれども、今日は、そんなことでよろしく。ちなみに、伊藤さんの自己病名を紹介していただけますか。

伊藤 オーソドックスなものでは「統合失調症全力疾走依存慌てるタイプ」で、全力で頑張っって何か空回りしたりして、さっきの慌てる現象が出るということです。最近では、慌てたり、大声を出すのに加えて、会議中に体の電源が落ちて、本当に会議に出ているも何も考えられなくなって、ときには強引に帰りますと言って帰ってしまったりするような「強制終了現象」、これも研究の途中です。

向谷地 今、研究中ですね。べてるでは全然苦にならないよね。

伊藤 はい。

向谷地 そんな伊藤さんですが、今日はよろしくお願いします。

「弱さを絆に」を合言葉に

向谷地 亀井さん、お待たせしました。

亀井英俊 亀井英俊と申します。統合失調症で、幻聴が聞こえてきて、幻視も見えて、妄想もあります。緊張してしまって、緊張タイプです。

向谷地 今日はどんな緊張をしていますか。

亀井 トイレが近くて、トイレを我慢していて、ぶつかりました。

向谷地 遠慮なく、講演中でも言ってください。今日はどんな幻聴ですか。

亀井 彼女が出てきて・・・。

向谷地 そうですね。昨日、私たちは神奈川の戸塚のお寺で交流会がありました。最近のお寺はしゃれていて、お寺の境内に小さなカフェがあったり、すごく素敵な所です。そこに彼女が来てくれて、遠距離恋愛ですけど。

亀井 遠距離恋愛ってすごいですね。これから大変じゃないかと、ステイするのが大変じゃないかと思って。

向谷地 遠距離誤作動恋愛ですね。

亀井 そうですね。ちょっと頑張らなくては付き合いができないので、覚悟しています。

向谷地 悲壮な恋愛ですね。(笑)面白いですね。私たちは、統合失調症とか発達障がいとか、いろんな苦勞を抱えた人たちと一緒に仕事をしていいますが、わかるのは、人間の五感は一人一人本当に違うということです。あまりそういうことは注目されることはありませんが、例えば「おはよう」と言った言葉が、「あっち行け」に入ってしまったたり、私は笑顔なのに、相手には怒っているような顔に見えたり、本当に一人一人みんな違います。特に、統合失調症を持った人たちは、それがはなはだしい。そういうことでは、コミュニケーションはずれずれになってしまって、いろいろなトラブルに発展したりするし、特に恋愛という高度な人間関係は、一層難しいですね。亀井さんは、何か一つ発見したんですよね。

亀井 「LINE (ライン)」だったらストレスがなくて、結構付き合えそうな感じがしました。

向谷地 メールでやり取りをしたときは、やり取りがものすごく負担だったのですが、LINEに切り替えたら・・・。

亀井 メールだと、見るときに受信をして、いろいろボックスを起こさないとメールを見られないのですが、LINEだとそのまま見られるので楽にできると思います。

向谷地 そういうことで、皆さんも、若い人たちはよく工夫してみてください。彼氏、彼女と連絡を取るときは、普通のメールではなくてLINEのほうがサクサク行って、誤作動が起きにくい

という亀井さんの実験です。今日はこんな面々でやっていきたいと思います。それでは、最初にべてるの紹介、この30年の歩みを紹介させていただきます。

【DVD上映】

向谷地 最後のあれは亀井さんの歌です。亀井さんの作詞。

亀井 作詞ができるとは思わなかったです。

向谷地 亀井さんの作詞ですね。伊藤さんも若かったですね。

伊藤 若かったし、やせていましたね。

向谷地 そういう過疎の町の中で、私たちはこの37年間、町はどんどん経済も半分以上に縮小し、過疎化が進む中で、私たちは「弱さをきずなに」という一つのキーワードを掲げながら、何しろ強くある、そういう在り方ではなくて、むしろ自分の中にある、自分が本当は捨ててしまいたいような弱い部分とか、要求を抱えているところを、むしろ自分たちの大切な一つの部分として、それを出し合って、つながり合ったときに、そこには不思議な力が生まれることを経験してきました。

当事者活動と専門家集団の文化の違い

向谷地 ソーシャルワーカーで言えば、私は学生時代、難病患者運動とか脳性麻痺の人たちの自立生活運動とか、そういうものに触れて学生時代を過ごし、その中で育てられました。その感覚があって、そして、突然私は精神科医療の領域にたまたま縁があって、そこでワーカーとして仕事を始めたときに、専門家チームの中で、「患者と距離を取らなければならないよ」、「この人たちはややかしい人たちだから」という言葉が行き交って、「名刺にも住所を入れたらだめだよ」とか、そういうことにものすごく違和感がありました。私が、学生時代に育てられた当事者運動とか当事者活動の文化とは違う空気を、専門家集団の中に感じました。

特に、私の学生時代は難病のボランティアを特に一生懸命やったし、当時は、札幌にまだ2カ所しかなかった特別養護老人ホームに住み込み

で、夜間介護人ということで、食事介助、入浴介助、毎日の洗濯、そういうことに明け暮れながら、大学に通っているんなボランティア活動をしてきた。その中で学んだ、実際にそういう現実を生きている人たちの息づかいとかそういうものを、いきなり専門家の診療チームの中に身を置いたときに、明らかに空気の違いを感じた。特に、精神科医療の中でそれは顕著です。引切りなしに「距離、距離」と言うわけです。

私は、当事者運動とか、当事者活動とか、難病患者運動をしている中で、いろんな難病の研究者たちや保健師たちといろんな活動を一生懸命してきましたが、そういうことは、少なくとも難病や障がい者の自立生活運動の中では言われてこなかった。精神科医療の世界に身を置いた途端に、「距離、巻き込まれないように」という、いかにも当事者の皆さんをややかしい人たちというふうな、何か遠ざけようという空気を感じ、先ほど言ったように、へそ曲がりの私は、名刺にしっかり住所も電話番号も書き込んで、「いつでも電話をください」と言って名刺を渡しました。

37年間私のスタンスは全く変わっていません。ですから、今でも自分の名刺には住所も電話番号も書いていますし、私の携帯のリストには千件のリストが入っていますが、大体全国の当事者の皆さんとか家族とか、ほとんどみんなが私の住所と電話番号を知り尽くしています。しかし、私はそれで困ったことはありません。

このべてるの活動を始めたときに、何で一緒に住もうと思ったかということ、私たちのソーシャルワークの歴史をずっとたどっていくと、まさに産業革命に行き着きます。あの当時、科学が活発になって、いろんな産業革命が起きて、工業化されて、そして、まさにイギリスは、世界を工場のようにして植民地を広げていく中で、貧富の差がどんどん拡大して行って、そこにスラムが生まれました。そのスラムの中に飛び込んでいった教会の青年たち、ボランティアに飛び込んでいった青年たちが、のちにソーシャルワーカーのスタートになるわけです。私の福祉の原点は、まさに困って

いる人たちとか、その現実の中に自らその中に飛び込んでいって、一緒に暮らす中でともにその現実を見据えて、変革していくというのが、私の学生時代に、また、ソーシャルワークの歴史の中に、何か私の中に植え付けられたものがあったように思います。

しかし、私は学生時代、精神科においてのソーシャルワークのトレーニングを受けたわけではありません。たまたま縁あって浦河に行きました。ある時から突然白衣を着て、「うちの息子にどう付き合ったらいいだろうか」とか、「うちの息子は、訳がわからないことを言って荒れているんです」というふうなことを言われた時に、「病気ですから、もう少し理解してあげる必要があるんじゃないでしょうか」というような、わかりきったことを言う自分に背筋がゾットとする感じがして、もしかしたら、私がこの家族だったら、私も戸惑ってどうしようもなくなるんじゃないか。いや、ここにいる先生たちも、看護師だって、誰もがこの家族の立場になったら、みんな戸惑ってどうしていいかわからなくなるはずだ。そう思ったときに、私には、まさにあの産業革命時代、あのスラムに飛び込んでいった私たちの先輩たちの光景が目につかび、「そうだ、私も一緒に暮らしてみよう」と思いました。それがべてるの家、古い教会の空き部屋に、ちょうど足かけ3年半、一緒に暮らすわけです。そうすると、いろんなことが見えてきます。

精神医学の常識と「幻覚妄想大会」

向谷地 例えば精神医学の教科書、精神科領域の専門家のトレーニングの中では、例えば幻覚妄想というものをどう扱うかという記述には、幻覚妄想はあり得ない異常の世界なので、それに共感したり、同意したり、それを認めるような立場を取るべきではない。もし間違っ、て、そういうことを認めたり、共感したりすると、その症状は強化されてもっと悪化するみたいなことが書いてあります。いわゆる否定も肯定もせず、ゆっくりとその異常な世界から視野を現実の世界に移して、その

世界の異様な話に付き合っはならないということが、まことしやかに言われています。

私は医学の専門家ではありませんが、当事者の皆さんと一緒に同じ屋根の下に暮らし始めると、幻覚妄想という世界は、まさにおかしの世界です。例えば、先ほどDVDでグランプリを取った場面が出てきました。彼はなぜグランプリを取ったか。

私たちは住居で話をしました。彼は2階に住んでいました。すると、「向谷地さん、昨日ね、窓からね、牛が顔を出したんだ」「牛が顔を出した？ここ2階だよ、そうしたら他のメンバーが、「それ、キリンなんじゃない？」と言うわけです。「そうだよな。ここは2階だし、2階に顔を出せる牛って、きっとキリンかもしれない」、しかし、本人は「牛だ」と言うのです。「どんな顔をしていた」「緑色だった」、これはおかしいと皆で笑いけるわけです。「何で牛だってわかったの」「臭い匂いがしてきた」「臭い匂いって、どんな匂いだった？」「何かおしっこの匂いがしてきた」。そうしたら、あるメンバーが「最近、おまえ、2階から立ちションしてないか？」と尋ねると「あ、ばれたか」と。(笑)彼は、夜、2階から下のトイレに下りてくるのが面倒臭くて、2階の窓から立ちションをしていた。

そうしたら、その辺の窓にはちょっと付いているわけです。それが匂っている。でも、彼はそれを見られないように、いつも気を張って、誰かに言われるのではないかと気を張っていた。そうしたら、急に臭い匂いが窓からしてきて「牛にらまれた、見られた」と。この話をした時、皆は笑い転げて「俺たちだけで楽しんでいてはもったいない。今度、べてる祭りでイベントをやったらどうだ」と言って生まれたのが、幻覚妄想大会です。そして、彼は何とグランプリを取りました。

精神医学の常識では、絶対その世界に立ち入ってはならないという常識です。しかし、私はいい加減なソーシャルワーカーですから、その人たちの生活の中に一緒に入って、その人たちと一緒にその世界の中で暮らしていると、それは何とも言

われない、異常とかではなくて、ある種のおかしみとか、何か豊かさの世界である。どんな病理とか問題とか、一見すれば社会的な常識を反するようなこと、倫理的に許せないと思えるような状況でも、そのことを通して、私は1人その中にちゃんと立ち止まって、その人と一緒にその現実に入り込んで、その人の置かれている状況を見渡したときに、決してそれは無意味で、どうしようもない世界ではなくて、ちゃんとその人が生きてきた意味ある世界を構成していることが、本当にわかるようになりました。

そういう世界を醸し出す私なんかは、やはり既存の精神科の医療の基準から言うと、ちょっとずれていきます。そんなこともあって、私は窓際を5年間やったのですが、最後は、私にそういう訓練を与えてくれた先生も、5年目になって私のところに来て「君には負けたい」と言って、握手を求めてきました。これは、私にとってはとても大きな経験でした。

それ以来、私は、その人の世界と一緒に入って、善悪で評価するのではなくて、その人が生きてきた経験の中の知恵とか、意味とか、その人が生きて証、何も捨てるものはない、すべては大切な一步一步、足跡であるということ学ぶようになりました。

亀井さんに伺ってみたいと思うのですが、亀井さんは病院に入院しているとき、先ほど言われた、見えたり聞こえたりという体の中に起きている異変というのは、今まで医療者に話したことはありますか。

亀井 ないですね。

向谷地 ないですよ。

亀井 はい。

向谷地 7年間、入院していたんですね。

亀井 7年間入院しましたが、妄想の話はしなかったですね。

向谷地 もし話したとしたら、どうなったと思いますか。

亀井 シャベっても、あなたのことはわかりませんと言われましたけど。

向谷地 シャベっても、あなたのことはわかりま

せんね。例えば神様の声が聞こえるとか、あとはどんなことがありましたか。

亀井 神様の声が聞こえるという話とか……。神様の声が聞こえるという話をしていました。

向谷地 そうしたら「ああ、また始まった」という形になるわけですね。私たちが、べてるの文化の中から生み出した一つの活動が「当事者研究」という活動です。その人の経験の中に一緒に入って、一緒に多様化されながら、その世界の意義を一緒に見いだしながら、生きていくすべをともに模索していくという活動を「当事者研究」と、私たちは言っています。

亀井さん、私たちは、亀井さんの神様の話とか、亀井さんの体の中に起きる不思議な現象を、一生懸命お話を聞いて、対応して、一緒に考えていくのですが、聞かれることは苦痛ですか。

亀井 神様の話は、しゃべりたいです。

向谷地 シャべりたいですね。伊藤さんはどうですか。

伊藤 いろんな自分のエピソードについては、亀井くんと同様に、しゃべってスッキリしたい気分です。

「当事者研究」の気づき

向谷地 やはりその人に起きている現実、その現実をしっかり受け止めながら分かち合う。しかし、それは決して自己洞察ではないですね。私たちは、2001年に当事者研究という活動を始めました。すると、何とメンバーたちは本当に研究好きだということがわかります。

例えばこんな電話が私のところに来ました。「向谷地さん、発見しました」、この電話をくれた方は統合失調症を持っています。家族とマンション暮らしをしています。周りのマンションから全部自分が監視されている、2階にもかつて自分をいじめたいじめっ子が潜んでいて、自分にどしどしと音を立てて嫌がらせをする。ですから、真夏でも真冬でもカーテンを開けられない、テレビも見られないという方です。私たち仲間で行って、その方と当事者研究をしました。すると、その彼女

から電話が来ました。基本、私は24時間いつでも電話OKにしているので、いろんな時間帯にかかってきます。しかし、いつでもいいよというふうにすると、皆さん気を使ってあまり電話をかけてこないというメリットがあります。今朝も、朝5時ぐらいにメンバーから電話がかかってきて、SOSの連絡があって来たのですが、A子さんはこんなふうに言ってました。「向谷地さん、今、よろしいですか」「こんにちば、いいですよ」「向谷地さん、発見しました。5日間、誰とも連絡を取らない実験をしました。そうしたら、本当に具合が悪くなって、見られている感じが強くなって、順調に生きているのが嫌になりました」と。すごいでしょう。やっぱり自分は、仲間に助けられていることがわかったんです。「A子さん、引きこもり実験すばらしいですね」「向谷地さん、それとね、もう一つ大事なことは、誰かからの連絡を待つんじゃなくて、自分から連絡をするって大事だなんて思ったことと、将来、自分のような立場の人が電話をしてみたいと思われる人になるうと思っただけです」ということでした。伊藤さん、これを聞いていかがですか。

伊藤 いいですね。自分がこうなりたいというのは、こういう学会だからいっちゃるかどうかわかりませんが、やはり僕も考えさせられますね。

向谷地 亀井さん、いかがですか。

亀井 実験は大成功だと思います。

向谷地 この方は大成功ですね。私は、この方に言ったんです。「窓を閉めて、家から出ない。これもあなたなりに工夫して、工夫して、こうすることで自分が楽に生きられるという試行錯誤の上で、あなたは発見されたんですね。外に出ないという方法も、あなたが様々な試行錯誤を重ねて、今到達した到達点なんですね。素晴らしいですね」と。そうしたら、一緒にいたお母さんが、「素晴らしい？私は、それが困って、困って、向谷地さんたちに相談したのに、素晴らしいですか？窓も開けないし、テレビも見られないのに」「お母さんね、テレビも見ない、カーテンも開けない、家

から出ないということが、彼女なりにいろんな経験を重ねて、今、様々な経験から彼女が選択した自分の最高の助け方なんです。でも、A子さん、このあなたの試行錯誤の末、獲得した外に出ないという一つの自分の助け方の満足度はどうですか」「満足度は10点です」「そうか、もうちょっと上げたいですね。どれぐらい上げたいですか」「せいぜい70点か80点の自分の助け方を探したいです」「じゃ、一緒に探しましょうよ。一緒に協力しますよ」と話しました。

彼女は、外に出られるように、出られるようにということで、どんどん薬が積み重なって、その薬の重圧で逆に沈み込んでしまうという悪循環でした。ですが、この彼女から先日、「向谷地さん、いろんな実験を重ねて、自分に自信が出てきました。薬もちょっと減ってきました。昔、この病気のおかげで辞めた元のお店に、恐る恐る電話してみました。『しばらくぶりです、A子です』、そうしたら『少し調子がよかったらアルバイトで来てみない？』と言われた、うれしかった。ちょっとアルバイトに行ってみようと思います」ということを、このA子さんから電話を頂きました。

そして、こんなメールも来ます。「向谷地さん、幻聴のいた非現実的な世界から抜け出て、現実世界で心が空っぽだよ。目の前のこと、幻聴に追われていた毎日から何もない世界にぼつんと1人たたずんでいるように、未来が見えない、わからない」。いつも幻聴や妄想がいっぱいいて、それがつらいつらいと言っていた。だけど、たまたま薬が効いたのか、何が効いたのか、妄想や声がだんだん和らいで聞こえなくなると、本当にむなしさがつーつとこみ上げてきて、自分は孤独だったんだということが見えてくる。そうか、皆さんたちは一個一個病気の症状と言われているその殻の中に守られて、現実を遮断し、その中でつかの間の息抜きをしているんだ。亀井さん、この辺の世界はいかがですか。

亀井 幻聴の世界に逃げている、現実に住む世界は、ちょっとわからないところがありますね。

向谷地 当事者研究をすると、こういう声なき声

が本当に浮かび上がってきます。2001年に当事者研究を始めて、従来、専門家がいろいろ研究的に、観察的に、統合失調症の人はこうだ、精神障がいの人たちはこうだと言っていた世界とは違う世界が、当事者の中にあることに気が付きました。そして、病気とか障がいはなくすればいいとか、それは決して無意味で、私たちの生活を脅かす出来事ではなくして、もしかしたら、つらいけれども、そのことそのものが一つの大切な意味ある現実なのではないかというふうに思うようになりました。

認知・ヒューマニスティック・アプローチ

向谷地 そういう時に、私もいろんな影響を受けた、この日本社会事業大学の小松源助先生が2002年に出された、「ソーシャルワーク実践理論の基礎的研究」の中に、ゴールドシュタインの「認知・ヒューマニスティック・アプローチ」の紹介がされていました。

私は、クライアントと共同して、クライアントの生活状況の問題となる、もしくは混沌とした事情の中で意味を理解し、意味を見いだしていこうとする立場、ゴールドシュタインのこの理論は、これから21世紀、これからソーシャルワーカーが受け継いでいかなければならない大切な理論である、見方である。そして、実際にプロセスを見て、クライアントの主体的世界を理解するためには、クライアントとワーカーの会話が重要である。対応を通してクライアントが自ら生きる関係性の中に反映することができる。そして、アプローチの原則として、このような原則を紹介されていました。

私はこれを見たときに、これこそまさに小松先生が、私たちソーシャルワーカーに、これからはこのゴールドシュタインの「認知・ヒューマニスティック・アプローチ」が、一つ大切な足掛かりになるぞ。21世紀に敬承すべき福祉、ソーシャルワーク理論、そういう中で、このゴールドシュタインのことを紹介していた。これは、私たちは改めて、小松先生が私たちに残そうとした、この

発想、この見方こそ、今、私たちが一番求められている、まさにクライアントの場からの出発ということなのではないかというふうに思います。

今日は、この大変な歴史ある学会の基調講演という役割を与えて頂きまして、本当にありがとうございました。もしかしたらフロアの中に、きっと伊藤さんや亀井さんに似たような経験を持った方がいるかもしれません。こういうことは、どんどん即興で舞台上が上がっていただいても構いませんので、午後のワークショップもよろしくお願ひします。それでは、これで基調講演を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

(録音データより再構成：古屋龍太)